

## 第4段階 ガリラヤの大宣教

### の宣教における第二の過越祭

#### 2. イエスは父なる神と同等であると主張する

ディリージーザスニュース #061

ペーステキスト: ヨハネ5.15-20 (並行テキスト: なし)

15 この人は立ち去って、自分をいやしたのはイエスであると、ユダヤ人の指導者たちに告げた。 16 それで、イエスが安息日にこのようなことをしていたので、ユダヤ人の指導者たちはイエスを迫害した。

17 イエスは弁明として彼らに言われた。「わたしの父は今も働いておられる。だからわたしも働いているのだ。」

18 そのために、彼らはますますイエスを殺そうとした。イエスは安息日を破り続けたばかりか、神を自分の父と呼び、自分を神と等しい者としたからである。

19 イエスは彼らに答えて言われた。「よくよくあなたがたに告げます。子は父のなさることを見てする以外には、自分からは何事もすることができます。父のなさることは何でも、子も同じようになさるからです。」

20 「父は常に子を愛して、御自分がなさるすべてのことを子にお示しになる。そして、父はこれよりもさらに大きなわざを子にお示しになるであろう。それゆえ、あなた方は絶えず驚くであろう。」

=====

注: 私たちは「混合テキスト」の原典福音書を次のように上付き文字で識別します: マタイ = MT、マーカー = M、ルーカ = L、ヨハネ = J、使徒行伝 = A。この「上付きID」は引用文の冒頭に挿入され、別の上付き文字が現れるまでその聖書の書を識別します。さらに、**イエスの言葉は赤の斜体で表記されています**。旧約聖書からの引用は大文字で表記されています。

#### コンテキストダイジェスト

位置	エルサレムの神殿の庭
タイムライン	西暦31年4月初旬（第15月）
イエスの生涯	第4段階: ガリラヤの大宣教
	の宣教における2回目の過越祭
タイトル	2. イエスは父なる神と同等であると主張する

## 第4段階 ガリラヤの大宣教

コメント：

これらの節で、イエスは彼の全宣教活動の中で最も驚くべき神の主張のいくつかを宣言しました。指導者たちが非常によく知っていたように、イエスは父と同等の者となられました。これは聖書全体の中で並ぶものない神の主張です。

イエスのこのような考え方から、三位一体の教義が生まれました。三位一体とは、神は一つの神性であり、父、子、聖霊という三つの別個の位格において平等に共有されているというものです。イエスは三位一体の教義を具体的に定義したことはありませんが、常にその現実を生き、このような聖句でそれを証言しました。

イエスは、父なる神と本質的に一体であり、神として平等であることを絶えず主張しましたが、同時に両者は別個の人格であり存在でした。2つの異なる性質や神は存在せず、1つでありながら同時に2つでした。ヨハネの福音書の最初の節から、この神秘は表現され、主張されました。同じことは聖霊にも当てはまり、したがって神は3つの別個の人格を持つ1つの神性、つまり三位一体です。

ここでイエスが言ったことの核心は、父が神であるのと全く同じように、イエスは神であるので、安息日に働く資格があるということです。

旧約聖書は、創造の7日目(創世記2:2)に神がそれ以上の作業を「休まれた」と証言しています。疲れたからではなく、作業が完了し、それ以上加えるものがなかったからです。神の休息は、神が創造した宇宙の維持と管理をやめたという意味ではありません。その意味では、神は作業を止めたことはなく、単に、すでに作ったものに新しい形の創造物を加えるのをやめただけです。完璧を達成した神の「休息」は、これ以上の独創的な創造の必要がなくなったことを認めたものでした。

ヨハネがすでに1.3で、イエスが創造の実際の主体であると述べていることを忘れないでください。  
**「すべてのものは、彼によって造られた。造られたもので、彼によらないものは一つもなかつた。」**  
ノイエスは「言葉」であり、創世記1章と2章に記されている「日々」に発言した者ですが、神は三位一体であるため、父なる神も「彼を通して」働いており、「神の霊」もまた存在し、協力していました(創世記1.2)。

そこで、父、子、聖霊は創造において神として完全に一体となって働きました。彼らは新しい生命体を創造することから一緒に「休息」に入りました。その後、彼らは神であるというフルタイムの「仕事」の一環として、自分たちが作ったすべてのクオーク、原子、分子、細胞、構造、生物を積極的に維持し、管理し続けました。

三位一体は、太古の昔から宇宙の維持と制御を活発に行い、一瞬たりとも休んだことはありません。休んだら、創造されたすべてのものが崩壊してしまうでしょう。

イエス、父、聖霊は、三位一体の神であるので、常に愛の交わりがあり、常に共に働いています。しかし、イエスは人間になったとき、神の性質に真の人間性を加えました。人間性において、イエスは父に従属し、また永遠の神性において父と一体です。

## 第4段階 ガリラヤの大宣教

イエスは地上での生活において、常に父に従うという人間としての正しい立場をとられました。この点においてイエスは完璧な模範です。イエスは人間としての独断で行動することを拒み、父との永遠の一体性を保つために、常に父の指示に従い、愛をもって従うことを中心がけられました。

したがって、イエスは人間の安息日の主でした。なぜなら、父が働くのを決してやめなかつたように、イエスも働くなかつたからです。父はイエスを愛し、イエスが従事している神聖な働きを常にイエスに示していました。神として、イエスは父と聖霊が行つてゐるあらゆる働きに加わる資格を完全に備えていました。実際、イエスは父と聖霊が3つの異なる位格で活発に調和して生きている1つの神聖な性質であったため、それ以上のことはできませんでした。

もしイエスが父と共に安息日に「働く」ことを拒否していたら、それは彼が神ではないことを認めることになります。神は決して休暇をとりません。宇宙全体の存続はその事実に基づいています。

これらはイエスが当然のこととして受け入れた真実であり、神であると主張して冒涜の罪で告発されたときに自らを弁護するために宣言した真実です。

応用：

イエスは、自分だけの独立した主導で行動することを拒みました。イエスは、何をするにも常に父と協調し、協力し、交わりを持ちました。これは、私たち一人ひとりにとってイエスが示した人間としての模範の最も重要な側面の一つです。

イエスが父に対して従順であった以上に、私たちはイエスに従順で依存するべきです。私たちは毎日、自分の考え方や感情に従つて、自然に自分の主導で行動します。イエスに従う者として、私たちは常に異なる生き方を学んでいます。つまり、自分の主導ではなく、イエスの主導や指示に自分を合わせることです。イエスにもっと完全に従うことを学ぶのは、生涯にわたるプロセスです。

あなたの現在のライフスタイルのどの側面がイエスによって始められなかつたか、つまりイエスから来たものではないか。気づくことがイエスによって変えられる第一歩です。

イエスの考え方や行動様式に変えるには、どのような具体的な行動や思考パターンをイエスのもとに持ち込む必要がありますか。

あなたは、自分の中に必要な変化を成し遂げるために、どのように神の力に「頼る」つもりですか？